農が繋ぐ心のバリアフリー

千葉県立流山高等学校　二年
平山（ひらやま）　優奈（ゆうな）

「患者さんは皆、元気だった頃に戻ろうと必死にリハビリを頑張る。でも、現実には元通りにならない場合の方が多い。そんな現実に苦しみ、リハビリの意欲を失う人も少なくないんだよ。」これは、臨床心理士として働く母から聞いた言葉です。この言葉が、私が農福連携について考える原点になりました。父は言語聴覚士、母は臨床心理士として働いています。私は幼い頃から、人を支える仕事を身近に感じながら育ってきました。そんな私が農福連携に興味を持つようになったきっかけは、祖父の存在です。祖父は末期がんが見つかり、認知症も進行したことから、私たち家族と暮らすようになりました。祖父と過ごした時間は決して長くありませんでした。それでも祖父は、いつも私を気にかけ、大切にしてくれる存在でした。しかし、病気が進むにつれ、少しずつできることが減っていきました。私は、その姿を見ていることしかできませんでした。その時、私の中に一つの問いが生まれました。

「何か私にできることはないだろうか。」

その答えを探すため、私は課題研究で高齢者疑似体験を行いました。腕や足に重りを付け、関節の動きを制限した状態で、トマトへの潅水やナスの収穫を行いました。普段なら何気なくできる作業なのに、ホースは重く、しゃがむことさえ思うようにできません。体はすぐに疲れました。思うように動けません。もどかしさだけが残りました。その時、散歩の途中で立ち止まっていた祖父の姿が頭に浮かびました。私はずっと、「疲れたから休んでいる」と思っていました。でも、本当は歩きたかったのに、歩けなかったのかもしれません。私は祖父の気持ちを分かったつもりでいました。でも、本当は何も分かっていなかったのです。病気や障害を抱える人は、どのような思いで毎日を過ごしているのだろう。私も、誰かの力になれるのだろうか。

そう考えていた時、母は病院での出来事を話してくれました。軽度認知症の患者さんは、家族から「危ないから何もしなくていい」と言われることが増え、自分にできることがないと自信を失っていたそうです。そんな患者さんに、職員の方は「今日は農作業やる?」と優しく声を掛けました。「やる!」そう笑顔で答え、皆と一緒にジャガイモを育てました。収穫したジャガイモを囲み、「みんなで作ったから美味しいに

決まっている。」そう笑顔で話していたと母は教えてくれました。私はその話を聞き、農業には作物を育てるだけではない力があることを知りました。土に触れ、種を蒔き、水を与え、収穫する。その積み重ねは、「自分にもできた」という達成感につながります。そして、皆で育てた作物を囲み、喜びを分かち合う時間は、人とのつながりや生きがいを育てる時間でもあります。私は、農業には人が役割を持ち、自分らしく生きる力を支える大きな可能性があると感じました。

そして、高齢者疑似体験と母から聞いた話を通して、一つのことに気付きました。身体や認知に障害を抱える人が農作業を続けるためには、人の支えだけでは足りません。だからこそ、仕組みや技術にも、目を向けるべきだと。そこで私が可能性を感じたのは、本校で学んでいるデジタル技術です。本校はＤＸハイスクール指定校として、ＩＣＴやデジタル技術を活用した学習を進めています。農場では、タブレットを使って作業手順を動画で確認したり、栽培記録をその場で入力・共有したりしています。私は、この学びを農福連携にも生かせると考えています。例えば、障害のある人の理解に合わせて作業手順を何度でも確認できたり、その日の作業内容を支援者同士で共有したりすることで、その人に合った支援につながると考えました。このような技術は、人の代わりに働くものではありません。その人らしい「できる」を支え、その可能性を広げるための技術です。私は、高齢者疑似体験や母から聞いた話を通して、人だけで支えることには限界があると感じました。

しかし、農業・福祉・デジタル技術、それぞれの力を組み合わせることで、その人に合った支援はもっと広がると考えています。病気や障害があっても、自分らしく役割を持ち、生きがいを感じながら暮らせる人を増やせると私は信じています。農が繋ぐ心のバリアフリー。それは、できない部分をそっと支え、出来る喜びを最大化するということです。病院で母から聞いた患者さんの笑顔を思い浮かべるたび、祖父のことが頭に浮かびます。祖父にも、あんな笑顔で過ごせる時間があったらよかったのに。その思いは、今でも私の中にあります。私は農業・福祉・デジタル技術を学び、誰もが役割を持ち、その人らしく生きられる社会の実現に貢献したいです。祖父との経験から始まった「何か私にできることはないだろうか。」という問いを原点に、農業を通して一人でも多くの人の「できる」を支えられる人材を目指します。